

「プラグマティズムの守則」をめぐる

浅輪 幸夫

I

一八七七年から七八年にかけて、「通俗科学月報」に連載された、C・S・パースの一連の論文は、それまでアメリカの哲学がこうむっていたヨーロッパ（とくに、イギリスとドイツ）の哲学の圧倒的影響から脱皮し、真のオリジナルティをもった哲学が新大陸で生みだされてゆく、ひとつの出発点となっている。この記念碑的論文が世にとわれるにいたる以前の、つまり、アメリカ哲学における夜明け前の時期を、H・G・タウンゼントはその『アメリカ哲学史』のなかでこう記述している。

「アメリカ哲学を研究する人々は、時には倦怠を感じる長々しい旅を経て、遂にその最も生産的時期に到達する。エドワーズ（J. Edwards）からロイス（J. Royce）、C・S・パースまでの間には、反復があるばかりで独創性は皆無に近い。百二十五年にわたってそこに展開されたのは、古き藁をなうことだけだった。」

パースがそこに創出してみせた思想は、たんに、アメリカ哲学史上の新しいわらであっただけにとどまらない。それは世界の哲学史上の新しいわらであった、といっても過言ではない。いわば、それは当時の世界の先端的哲学思想と優に拮抗しうる一般的普遍的な内容を含意していた。

この新しいわらになって作られたなわは、いうまでもなく、プラグマティズムである。そして、この新しいなわのない手が、W・ジェイムズ、J・デューイをはじめとする、多くのプラグマティストたちである、ということとは周知のとおりである。そこで、本論に進むに先だち、わたしはここで、話の本すじから外れるかもしれぬが、前おきとなる事項をすこし書きとめておきたいとおもう。

それは、プラグマティズムと称されるひとつの哲学思想も、それが思想として（観念として）成立し、発達する過程を内容にそくして研究するとき、わたしたちはその歴史的社会的背景をまったく思慮の外においたままであつてはならぬ、ということである。これは、当然のことだ、といわれればそれまでのことではあるが。プラグマティズムのもつ一般的特徴、たとえば、思想と行動の一元化あるいは連続性、非形而上学的、経験的知識の尊重、現実主義、科学主義などは、その背景としての、十九世紀後半から二十世紀初期にわたるアメリカ資本制産業社会の破天荒の膨張過程をぬいて考えられない。また一方では、M・ヴァーバーなどの分析にみられるごとき、資本主義社会におけるブルジョワジーの行動、思想、信念を正当化するために改ざんされ、世俗化された（宗教的）世界観や倫理観と、ヤンキー特有の発明発見への興味、応用科学への関心などが、ようやくひとびと（とくに、ブルジョワジー、インテリたち）の間にひろまり、定着しつつある時期でもあった。

パースの思想がオリジナリティーをもつというのは、それら当時のアメリカ社会に（善悪は別にして）定着しつつあった思想的傾向や内在的意味を、厳密な思考とおして、その核心の部分でひろいあげてみせた、という意味

あいにおいてであり、他方では、ヨーロッパの伝統的哲学が無視したり軽視していた、または十分評価しえなかった問題を解くための橋頭堡をきずいた、という意味においてである。「新しいわら」、「新しいなわ」というとき、そのもとの稲は多くの生活人、大衆がすでに根づかせていたものであり、それもまた新種なのである。思想のオリジナリティーはけっして奇績ではない。

II

前述のパースの連載論文のうちのひとつ、『われわれの観念を明晰にする方法』のなかで、かれが定式化してみせた（プラグマティズムの守則）の問題について少し考えてみたい。⁽¹⁾

今日では有名になったこの観念も、発表当時は、アメリカの哲学アカデミズム、思想界一般からはほとんど注目されることなく、抹殺されてしまった。この守則の重要性を認めえたのは、パースの討論仲間であった、C・ライトをはじめとする。形而上学クラブ⁽²⁾の面々、その他ごく少数のものにすぎなかった。形而上学クラブ⁽²⁾という名称は、二重の意味がこめられていた、とわたしは考える。すなわち、伝統的形而上学を「共通の敵」とする態度をとっていたかれらのそれに対する皮肉の意味と、新たな形而上学の建設の意図を表明する意味とである。「ヨーロッパ哲学への全面的帰服」状態にあった当時のアメリカの哲学者たちが、その価値を正当に評価しえなかったからといって、べつに不思議はない。

二十年後、ジェイムズが世間に紹介することにより、プラグマティズムは衆人の環視を集めるにいたる。プラグマティズムが思想界に登場するには、あたかも社交界にデビューする花形のごとく、著名な実力者の紹介が必要だったのである。独創的思想が思想界に根づく契機としてはなんともなさけない話であるが、かかる事情は、パース

の場合にかぎられないのである。

しかも、ジェイムズによって、プラグマティズムが紹介され、かれやその後断者たちによって解釈され、展開せられたことは、パース自身の発想した「プラグマティズム」の正常な発達を意味していない。ジェイムズのプラグマティズム解釈は、「プラグマティズム運動は、ジェイムズによるパースの誤解に出發した」といわれるごとく、パースのそれといちじるしく異っている。現にパースは、ジェイムズの解釈を非難し、かれと自分の思想が同一視されることをこばんで、みずからの思想をプラグマティシズムと命名することを宣言している。もちろんこれは、当時ジャーナリズムの世界の流行語となり、俗化させられたプラグマティズムと自分の思想が異質であることを明言しておこう、との意図も含まれていた。にもかかわらず実生活上の恩人ですらあったジェイムズにたいして、パースがあらわな敵対感情をしめざるをえなかった（すぐあとで、かれはいい訳けめいた謝罪文まがいの手紙をかいているのだが）点からも、かれとジェイムズの間での公守則をめぐる解釈上の相違がいかに大きかったか、あるいは、かれからみていかに重大であったかを推しはかることができるのである。

パースは、後年、その『プラグマティズムとは何か』のなかで、カントのことは、プラクティシユとプラグマティシユのそれぞれの意味を簡潔に説明したあとでこういつている。

「わたしの新しい説のもっともいちじるしい特徴は、理性的な認識と理性的な目的とが分かれがたく結びついているという点を強調する点にある。そしてまさしくこういった考慮が、わたしに、プラグマティズムということばを選ばせたのである。」

パースは『信念のかため方』のなかで、確實だと考えられる知識、思想、意見、信念を獲得する方法として、固執の方法、権威の方法、ア・プリオリな方法、科学の方法の四つの方法を特色づけ、最後の科学の方法にもとずいてえられた信念こそもっとも信頼しうる、真理の具現化したものと評価した。そして、みずからそれにコミットしていることを示唆したのである。かれの生涯の仕事は、自分で述懐しているように、探究の方法を研究することであつた。この探究の方法とは科学的探究の方法にはかならない。したがって、かれにとっては、研究の主題がつねに科学的探究方法と密接に関連する領域にかぎられているということは、『信念のかため方』を発表したとき以来、明白な（ないし暗黙の）大前提であつた。

それゆえ、わたしたちは上述の引用文中でパースが使用している「理性」の概念に十分な注意をはらわなければならない。『純粹理性批判』にみられるごとく、カントは理性（カント的にいえば、純粹理性）の能力をきわめて狭義にしか理解していない。したがって、カントがプラグマティッシュの概念を説明して、「私はかかる偶然的、即ち或る行為を目的達成のための手段として実際に使用する場合、かかる使用の根底に存するところの信を、実用的（プラグマティッシュ）信と名づける」というとき、かれはその概念に第二義的、「偶然的」意義しかあたえていない（また、あたええなかつた）のである。しかしながら、パースは認識と目的とのあいだに記号、行動という媒介項を不可欠なものとして挿入することによって、「物自体」を否定しながら「理性」（カントの純粹理性）の活動範囲を飛躍的に拡大させた。いい方をかえれば、かれは理性の概念を内容的に拡大させ、豊富にしたうえで、カントからひきついでいる。この道程をふまえることによってはじめて、パースは、プラグマティッシュの概念に面目一新した重要な意義をあたえることができたのであり、そしてみずからの理論を逡巡することなく、プラグマティズムと呼びえたのである。一方それと同時に、かれはプラグマティッシュの概念を、理性の領域に属さぬとい

うように解釈して、カントのをうけ容れている。カントはいう、「理論的に不十分な意見でも信と呼ばれるのは、実践的（プラクティッシュ）関係においてのみ可能である」と。カントの見解によれば、この場合「不十分」であるのは、もちろん対象が理性の把握能力の限界を越えているがゆえである。けれども、パースのごとく科学的認識論の見地からみれば、「不十分」をひどくあいまいなと解しておけば、カントの文章はそのまま生かせるのである。わたしたちは、「理論的に不十分な」信念として、固執の方法や権威の方法による信念を想定しうるし、また、ア・プリオリな方法による信念の大部分をも含めることができるのである。⁽⁵⁾かかる理解にたてば、「実践的」関係の問題はプラグマティズムの対象領域から一応除外されねばならない。逆にいえば、パースにとって公プラグマティズムの守則を無制限にあらゆる領域に適用するのは、冒険というよりむしろ無謀な所作におもわれたにちがいない。公守則を限定した範囲をこえて適用した場合でも、そのままのかたちで公守則が有効性をもちうるということは、さらに理論的に証明される必要があったのである。

ところで、ジェイムズは、この理論的証明手続きをふむことなく、公守則にかなり大胆なゆるい解釈をほどこしながら、それを利用している。⁽⁶⁾厳密性を極度に尊んだパースの目には、ジェイムズがたいへん節度を欠いた思想家にうつったのはやむをえない。またパースが『信念のかため方』のところですでにのりこえてしまった（少くともパースはそう思った）科学的認識以前の段階に、ジェイムズがふたたび後退し、その地点でプラグマティズムを唱道することは一種の反動思想ともいいうるのである。

わたしは、ここでジェイムズの思想そのものをあげつらうたり、カリカチュア風に描いてみせるために、かれの思想をパースのそれとひき合せたのではない。わたしの意図は、ただ、パース流のプラグマティズム思想を発展的に消化してゆくとき、ジェイムズが他山の石（のひとつ）としてあることをのべたかったにすぎない。

III

〈守則〉の問題をさらに論するための口として、思考の一般的性質を少し考察してみよう。

明晰な観念ないし概念をもつということは、わたしたちが思考する場合、疑ひもなく、もつとも必要なことである。曖昧な観念や混乱した概念だけをもちいて推理思考するとき、思考はその本来の機能を發揮することができない。現実を正しく認識したり、自己の思想内容を正確に表現するためには、どうしても明晰な観念がなくてはならない。もし理想的思考というものを想像してみるならば、現実を正確に反映した明晰な観念と、正しい推論法則によってみちびかれる思考のあり方が表象されるであろう。（もつともこの場合、思想の発展がどのようにして可能かを説明するのに困難が生じるようにおもわれるが。）しかし、現実におけるわたしたちは、明晰判明な概念と曖昧で混乱した概念をいわゆる玉石混交のかたちでもちあわせ、それら諸概念を適当に使用しながら思考している、というのが普通であろう。具体的個別的な名辞（概念）であれば、その明晰度はかなり高度に確保される。それゆえ、その概念の意味把握をめぐる問題は生じることは少ない。また起っても、意見の一致、すなわち、同一の意味を把握した状態にもってゆくことは比較的容易である。これに反して、抽象的一般的概念の場合はそう簡単にはゆかない。

わたしたちがある主題をめぐる論争をするとき、そこに生じている論争の原因が概念の曖昧性にある場合もけつして少なくない。争点がかみあい、論争者同士同じ対象を一応は正しくとらえていながら、両者はたがいにまったく異った認識をもったものと誤解しあって、相手の非をたたき、みずからの意見の正しさを頑迷に主張してゆずらず、結局論争は結着のつかぬまま自然消滅してしまふ、そして、あとにはなんの実りも結果しない、ということとは

たんなる想像上の出来事ではない。もしも論争に使用される概念のうち主要な役割をはたす概念のいくらかでも明晰であったならば、従来の論争においてどれほど多くの無用な混乱がさけられたかはかりしれない。特殊な専門科学とちがって、一般に現実と直接かかわりのうすい抽象的普遍的問題が主題となる哲学（形而上学）の歴史において、それはとくに顕著にみられることである。

無用な混乱といっても、パースの思想を援用すれば、混乱が無用だということをかならずも意味するわけではない。パースの提唱したマチガイ主義（Fallibilism）はかれの多大な功績のひとつと数えることができるが、それによれば、わたしたちの経験的（綜合的）知識においては、絶対に確実で、究極的かつ普遍妥当なるものは存在しない。経験的認識においてさけられない誤謬は、悪なるものとして回避され、拒否され、無視さるべきものではなくて、じつはむしろ、わたしたちの現実にたいする認識を拡大発展させ、知識を向上させる重要な契機となっているものであり、またそう評価さるべきものである。このパースの思想は、認識論的には、分析哲学の理論につながっている。つまり簡単にいえば、絶対確実な判断はトートロジー（分析的）以外にありえず、経験的（綜合的）知識は蓋然性をもった知識であり、そのうちで確実とみなされるものも程度の差にとどまり、蓋然性が高いということにすぎぬと。

したがって、認識上誤謬はさけられぬ以上、論争において混乱をさけることはできない。ただ、さけうる混乱とさけえぬ混乱のうち、前者は（できることなら）できるだけ排除してゆくことがぞましい。というより、ぜひそうする必要がある。現実の認識をできうるかぎり正しく向上させ、また発展させてゆくという見地からすれば、「数はすくなくとも明晰な観念の方が、数は多くとも混乱した観念よりも、ねうちがあることに疑問の余地はないこと。」（V. 393）

ところで、パースは『われわれの観念を明晰にする方法』の終章でこういつている。

「われわれはこれまで、科学の論理学の入り口をまだまだいっていない。われわれの観念をどのようにして明晰にするかを知るのは、たしかに重要である。しかし観念がはなはだ明晰になっても、真理でない場合がある。観念をどうして真理にするかを、われわれはつぎに研究しなければならない。」（V. 410）

前述した一八七十七八年の一連の論文の統一的表題は『科学の論理の解明』⁽⁷⁾とされており、その最初の『信念のかため方』、二番目にこの『われわれの観念を明晰にする方法』が続いている。⁽⁸⁾したがって、引用文中の「これまで」とはこの二つの論文をさしている。ということは、とりもなおさず、この二つの論文で論ぜられた主要な観念なり思想、すなわち、「信念」や「疑念」「習慣」「プラグマティズムの守則」「実在」などの観念は、論理学それ自体の主題ではないということにはかならない。これはパースの視野の広さを示唆するとともに、当時のかれの研究態度、方向、主要な関心をよく示している点からも、記憶にとどむべき一節である。

正しい認識、真なる知識の獲得は、かれの主要目的であり、したがってそうするための方法の問題はかれの最大の関心事であった。論理学こそ自分の研究課題として主要な位置をしめていた当時のパースにとって、その二つの論文中の主たる概念は、論理学の前提となる題材であり、かれの関心からみて、周辺のないし辺境的課題としてなりたっている。論理学に熱中しながらも、けっして近視眼的にならず、つねに広い視野にたつてかかる課題に鋭い配慮と厳密な考察を欠かさなかったパースは、なみの思想家ではない。「論理学的問題をはじめて考えるときでさえ、種々の事実がすでに仮定されている……。たとえば、疑念と信念という二つの精神状態が存在すること、思考

の対象が同一のまままで精神状態が疑念から信念へと推移することが可能なこと、こうした精神状態の推移がある規則——それはあらゆる精神をひとしく拘束する——にしたがうこと等、が暗黙のうちにみとめられている」（V. 369）あるいはまた「われわれが論理学に教えよと要求する権利をもっている最初の課題は、われわれの観念を明晰にする方法である（V. 393）」といった文章で、わたしたちはそれを認めることができるであらう。

パースの研究経歴をたどってみればわかることだが、上述の諸観念、とくにプラグマティズムの理論は、パース自身においてさえも一八九〇年代の著作にいたるまでは、大きなウェイトをしめていない。プラグマティズムの理論が主題として正面きってとりあげられ、積極的かつ詳細に論ぜられるにいたるのは、前述したごとく、ジェイムズの紹介によって有名となり、多くのひとびとによって論議され、解釈され、主張されるようになってからのことである。プラグマティズムの理論が世間の注目をあびなかったならば、パース自身の理論をめぐるであれほど多くの著作をものにしたかどうか、疑問である。しかし、かかる仮定の問題は別としても、つぎのことは確かにいえるのである。つまり、後期のパースの哲学のなかで、プラグマティズムの理論（プラグマティズム）は中心的課題の貌をもつてうかびあがってきて、かれの後継者たちとの理論の支柱となり中核的役割をはたすことになるが、今プラグマティズムの守則が発表された当初（およびその後の十数年間）は、それはパースの哲学（探究の理論）の一部分を構成するにすぎず、したがって、かれもそれを重要な概念と認めながら、今日想像するほどには重視していなかった、ということである。

パースにおける前期のプラグマティズムの理論と後期のそれにたいして、パース研究家のあいだに評価のちがいが認められる。たとえば、M・G・マフィー（Murphy）やG・ジェントリー（Gentry）などはプラグマティズムの理論を前期のものの発展としてとらえているのにたいして、J・バックラー（Bucher）は、概していえ

ば、プラグマティズムの重要な原理的問題は少くとも前期の著作ですでに提起済みであるとみなしている。⁽⁹⁾ パースの前期と後期の理論の関係を発展とみるか、修正とみるかの相違は、主として、パースの創造したカテゴリーのいずれを重視するかによっている。ここでこの問題にたちいて論ずる余裕はないが、わたしの意見をのべれば、発展的過程としてそれをとらえる方が正しいようにおもふ。その理由をひとつあげてみると、まず、後期パースのプラグマティズム理論の核心的カテゴリーとなった「意味の汲み手 (interpretant)」⁽¹⁰⁾ の概念は、前期では未熟のまま提示されていたにすぎないが、後期のはその修正以上のものを含み、その部分（とくに「究極的論理的意味の汲み手 (final or ultimate logical interpretant)」）がプラグマティズム理論にとってきわめて大事であると考えからである。さらには、探究の理論を構成する基本的カテゴリー間の関係がいっそう明確に理解されることによって、パースの探究の理論の構造と限界がはっきりしてくるからである。いずれにせよ、かれのこれら初期の論文は画期的な意義を含みながらも、よく検討してみると、そこに使用されている基本的諸概念の内容や関連がかならずしもはっきり統一的に把握され、表明されていないようにみうけられる。そこに含まれる曖昧さは公守則をいく通りにも解釈することを可能にするものである。したがって、「ジェイムズの誤解」というとき、その責はジェイムズだけに帰せらるべきものではなく、パースの著作の側にも誤解されてしかるべき要素が含まれていたと考えねばならない。

パースは「概念的把握」の明晰化のさいこの段階に位置する方法概念としての公守則をつぎのようにして導出する。観念（概念）の明晰化の第一段階は、それになじむことである。なじむとは、たとえば、デカルトがひそかに持ちこんでいた方法的概念であり、いわば「理性にびったりすること」をさす。デカルトによれば、真理とは自己により直観的に把握されるものである。自己意識にとって明晰（判明）とおもわれる観念が信頼しうる真なる観

念である。懷疑（パース流に言えば、主として權威にたいする懷疑だ）的方法に拠って、コギトに真理の源泉をみいだしたデカルトにとって、「明晰にみえる觀念と、真に明晰である觀念とを、どう区別するかの問題」はおもいわずらうところではなかった。

第二段階は、概念に抽象的分析的定義をあたえることである。わたしたちは、ここでは、論理学の教科書にかならずでてくる例的分析的定義（いわゆる、種を類と種差で定義すること）を想起すれば理解しやすい。より抽象的概念に分析することによって概念の明晰化が達成されるとするこの考えは、抽象度の高い概念ほど明晰であるという仮定を前提としている。しかし、概念は抽象的であればあるほど明晰化を必要とするものである。それゆえ、この考えは自己矛盾である、といわざるをえない。わたしたちが「なじんだ」ものあるいは「ような」ものから、「である」ものの方向に、そしてまた、抽象的矛盾なものから具体的整合的なものの方向に、觀念の明晰化をもとめるとき、いかなる概念装置が考察されねばならないであろうか。

パースの第三の最終的段階の方法概念、 \langle プラグマティズムの守則 \rangle はこの要求に応じて生れてきたのである。しかしここにひとつの注意が必要である。それは、この移行過程の理論的裏づけは、かれが一八六八年に発表した諸論文、なかでも著名な「直観主義の批判」「人間記号論の試み」⁽⁴⁾のうちでなされていた、という点である。認識論的角度からみれば、デカルト、ライブニッツ、カントらに代表される大陸合理論や、ロック、ヒュームの流れにたつイギリス古典経験論が拠つたつ直観主義、内観的方法、不可知論はパースの承認しえぬところであった。その内容的説明は省略しておくとしても、わたしたちはかれのプラグマティズムの理論が、その根底のところでもヨーロッパの古典哲学への徹底的批判を遂行し、 \langle 守則 \rangle を発表したときすでにそれら古典哲学をのり越えた地点にたっていたことを見落したり、忘れたりしてはならないのである。

明晰化の第三段階は、つきつめていえば、「概念の対象の結果ないし効果の把握」と考えることができる。概念の対象の結果、あるいは概念の意味は、いかなる仕方でもわたしたちの心（身）的活動と結びつくか。心（身）的活動のうちのいかなる活動が、対象の結果あるいは意味を問題にするとき、重視されねばならぬか。このような疑問への解答は「公守則」の解釈の方向を規定する。一般的にいえば、それはパースの理論の解釈を規定するのみならず、それに続く後継者たちのプラグマティズムという思想の性格を決定する、と考えることができる。典型的な仕方では、それは二つの方向に区別される。一方は、それを思想—行動の局面でとらえ（行動主義の方向）、他方は、知覚—対象の局面でとらえる（マッハ主義の方向）考え方である。「公守則」をかかると単純な観点にたつて理解することはまったく誤りであるにもかかわらず、後続のプラグマティストばかりでなく、パース自身もこの初期論文において、ある程度そのように理解していた、と解されるふしがある。少くとも、そのように誤解されざるをえないような説明が随所にみうけられる。

パース自身その間の事情を反省しながら、誤解を正すため、後年にいたって、当初の「公守則」の公式化をつぎのようになるべっている。

「この学説（とくにジェイムズ思想）は、人間の目的は行動であるということを事実と仮定しているように思える。これはストア的公理であり、六十才の声をきく現在の著者（パース）にとっては、三十代の頃のように、それをがむしゃらに推称するわけにはいかない。」（V. 4）

「事実、一八七八年の論文において……この著者（パース）は自ら提唱したより以上のことを実際にはたしてい

る。というのは、彼はこのストア的守則をもつとも非禁欲的仕方で適用したからである。」同上）

非禁欲的仕方で適用とは、《守則》の適用例として、『われわれの観念を明晰にする方法』のなかでパースが例示してみせた「力一般」とくに「實在」の分析を意味しているのである。当面の問題と関わる面でその結論をのべれば、「結果」とは個別的単一的な事実なり結果なり、あるいはまた、そのたんなる集合を指示すのではなく、實在の普遍的結果——信念、習慣——を意味している（意味しなければならぬ）、ということである。

この反省的見解のひとつの典型は、『われわれの観念を明晰にする方法』の注3（一九〇六）にもとめることができる。少し長い引用になるが、煩雑をおそれずそれをあげておきたい。そこで、かれは「概念で考える（conceive）」というラテン語からの派生語を《守則》のなかで五回も使用したのはふたつのねらひがあったからである、とのべたあとで、こう続ける。

「一つは、私が意味を口にする場合、知的意味以外のいかなる意味においても示すことであつた。もう一つは、概念を知覚像とか、表象とか図式とか、あるいは概念以外の何かによって説明しようとするのだ、と理解されるすべての危険をさけるためであつた。だから私は、いかなるものよりももっとはつきり個別的である行動が、なんらかのシンボルの意味、あるいは、適切な解釈を形成できようなどというつもりはなかった。」

パースは観念論者ではないか、といわれれば、そうだとしか答えようがない。がしかし、そのようなマクロ的規

定は当面問題とならない。思想はそれにレッテルをはるることによって生きたり死んだりはいしない。ただ時代にたえるものを本質的にもかもたぬかによってそうなるのである。歴史にたえうる思想はだれの擁護がなくとも生き続けるし、たえぬものは多くの疵護をうけようともいずれば死ぬのである。いくら歴史不信の時代であっても、わたしたちは、その程度には、歴史の法則を信じていることができるのである。

右にみられるパースの限定は、意味論上きわめて重要である。プラグマティズム理論は知的意味のみを考える。したがって、「守則」は知的意味把握の場合にのみ適用さるべきで、それ以外の意味は考察の外におかれている。さらにまた、概念の意味は当の概念の属する範疇のうちにある何ものかであり、別の範疇に属するものではない。それゆえ、概念の意味を知覚領域にひきもどすことも、行動領域にしばってゆくことも、一口でいえば、個々の具体的現象の世界に還元することは、パースのプラグマティズム理論と無縁のものである。わたしは、種々の誤解をさけるため、この問題をさらに詳細におしすすめ、あるいはまた、かれのこの理論がいわゆる概念論とも異なるゆえんをあきらかにすべきであろう。しかし、それはいやおうなしにかれの「実在論（スコラの実在論）」を説明せなければならぬことになる。現在のわたしには、このやっかいな理論をうまく説明しうる自信も用意もないので、他の機会にゆずりたい。わたしは、いまここでは、ごく簡単にいつて、パースのいう概念の意味が知覚内容あるいは対象でも、具体的行動でもない、というだけにとどめておくことにする。なぜならば、この点こそ、かれの思想と他の多くのプラグマティストや俗流プラグマティズムの思想とのひとつの分岐点となっているからである。

IV

ギリシヤ以来今日にいたるまで、西洋の哲学史を通覧するとき、わたしたちはまず、プラトンの「イデア」の影

響力の尽大さに驚ろかされる。そしてつぎに、この「アイデア」の影、つまり実質性を喪失した「アイデア」に幻惑されている哲学者（形而上学者）の少くないことに驚ろかされる。観念というものは、本来、一種の両刃の剣的性質をもっているようである。たとえば、プラトンにあっては、わたしのみるかぎでは、「アイデア」も十分現実的根拠をもっていたと考えられる。ヨーロッパの文化的土壌に縁のうすいわたしにとっても、少くとも、かれが「アイデア」を生みだしてくる思想過程を追体験して、その「アイデア」の導出にあまり不自然さを感じることがない。しかしながら、一般に、現実との関係が断たれるとき、観念は人間の思想生活をおびやかす、きわめてやっかいな代物に転化し、変質する。「現実」がみえなくなったとき、あるいはそれを直視するにたええなくなったとき、観念は一段と魅力的容貌をもってわたしたちのち心をおとずれる、という経験をだれしも味わったことがある。現実意識が衰弱したとき、観念の世界に逃避し、埋没してしまいたいという誘惑の念にかられたり、またそうしてしまうのは人間性にとって決して不自然なこととおもえない。ただそのとき、かれは、現実と手を切る代償として観念の世界に永住権を獲得しただけのはなしである。そしてかかる疎外された観念は、わたしたちの思想と無縁にあることはいうまでもない。わたしは「アイデア」そのものを否定しているのではない。ただ、プラトンにとってプラトンの「アイデア」があったごとくある「アイデア」が、わたしたちに望まれているものである。

前にも少しふれたとおり、プラグマティズムは、現実と切れた観念への反発から別発した、古き形而上学への反対の意を表明したとき、プラグマティストたちは、意識的であれ無意識的であれ、わたしたちと同様、前述のごとき観念のもつ欠点や危険性を十分感知していたにちがいない。

しかしながら、その反発は、かれらの初心に反して、せまい現実主義、結果偏重の傾向、ラディカルな唯名論の方向に後続の多くの思想家たちを走らせるといふ、極端な反動現象をひきおこした。今日プラグマティズムは、一

般に、「実利主義的」で低俗な思想と、多くのひとからみなされている。その思想を全体的にみた場合、それはもともな評価だとわたしはおもう。つまりらぬプラグマティストが多くいるのは事実なのだから。

パースがみずからの思想の「実利主義的」でないことを言明したとき、かれはこの後者の危険性がプラグマティズムの身近にあることを十分見透していたのである。かかる洞察はかれをして上述のような極端な反動の方向に走らせることがなかった。この点からみても、かれのきり拓いていった（また、いこうとした）領域はきわめて微妙な、しかも困難なものである。そして、そこにかれの思想の価値があり、かれが生きつづけるひとつの理由がある、とわたしは考えている。

注

- (1) 「プラグマティズムの守則」という語自体は後から命名されたもので、当論文では使われていない。
 (2) このクラブのメンバーは、ライト、パースの他、O・W・ホームズ、J・ウオーナー、N・St・J・グリーン、W・ジェイムズ、それにJ・フィクス、F・E・アボットである。

- (3) (V・412) はパースの「選集(Collected Papers)」で五巻第四一二節を示す。以下同様。

- (4) 小論中の引用は、翻訳があるかぎり、それを利用することにした。ただし一部変更した箇所もある。利用せるものは左記の通り。「世界の思想14——プラグマティズム」(久野、上山訳) 河出書房。「世界の名著48——パース・ジェイムズ・デュイ」(上山、山下、魚津訳) 中央公論社。その他に、H・G・タウンゼント著「アメリカ哲学史」(市井訳) 岩波書店。カント著「純粹理性批判」(篠田訳) 岩波書店

- (5) 「大部分」というのは、この場合、数学や演繹論理学の知識を除かねばならぬからである。

- (6) たとえば『哲学の諸問題』のうち「知覚と概念」の章を参照

- (7) 原題は“Illustrations of the Logic of Science”

- (8) このシリーズ物の三番目以下を参考のため、順番に記しておく。“The Doctrine of Chances (II. 645～)”
 “The Probability of Induction (II. 669～)” “The Order of Nature (VI. 395～)” “Deduction, Induction, and

Hypothesis (II. 619~)”

(6) M. G. Murphy : The Development of Peirce's Philosophy—Wiener & Young ed. : Studies in the Philosophy of Charles Sanders Peirce

J. Buchler : Charles Peirce's Empiricism

(10) 「トキクチ」「解き口」という訳語は、端緒という意味に強調がおかれがちである点から、あえてわたしは採用しなかった。

(11) 山内氏の訳題「原題は“Questions concerning Faculties claimed for Man”及び“Some Consequences of four Incapacities”

(12) プラグマティズムの矮小化だけでは片づけられぬ問題が、その思想に内在していることは勿論である。